

詩人としての源實朝

滿井賢至

文學の性質はその時代に於ける民衆の思想の基調を成せる或る時代意識の上に立てられたものとしてのみ独自の色彩をかも得るものである。活氣的な時代、廢頽的な時代と截然と明確に識別する事は出来ないにしても、その時代々々に於て何等かの時代意識でも云ふべきものがあるのであつて、此の時代的思想の流れの上に作家が如何なる態度を取らうとも、結局作家自身はその時代の圈内から脱出する事は出来ないのである。此の意味に於て作家を知る事によつて時代的背景を察知する事が出来、時代の流れを知る事によつて作家個々人の傾向を掬取る事が出来るのである。

かく時代的背景と作家とは密接不可分の地位におかれるのであるが、今、時代を超越せんとして萬葉に情熱の全力を傾注した筈の實朝も又時代の子であり、流れに反逆しつつもその流れを脱れ出る事の出来なかつた彼である。其處に彼の魅力があり、独自の個性の光があるのである。

二

榮枯盛衰は世の常であるが、夢の様な平家の没落はその榮華が極に達してゐた丈に世人に與へた打激は大きかつた。

此の時代的なショックは華美な逸樂に慣らされてゐた世人、特に有識階級にある人々をして、人生の再認識を再考究を要求し、それが遂に人生への懷疑となり、やがては歴世的なある出世間な傾向を齎らすに至つた。即ち此の冷たい諸行無常の風は動搖した時代の思想的な暗黒の波として民衆を生への欲求、此土脱却の相ひ對する矛盾相剋の中に突き落したのである。で此の自己分裂解結の爲に惱みに惱み、生への光明、生の永遠性、即ち安心立命の爲に迷ひに迷つたのであつた。

従つて平安末期から鎌倉時代にかけての思想界は此の自己分裂解結の爲に終始したのである。此の暗黒の背景を宿命付けられた人々の成せる歌は總て之等の内面の吐露であり、血で綴られた人生歌でもあつた。それは生への弱き執着と意志との闘争歌であり、なま／＼しい體驗の手記でもあつた。西行にしても長明にしても一面此の弱さをさうする事も出来なかつた。

三

さうする事も出来ない自己の弱さを痛感する時、そこには宗教の萌擡がある。強く生きんとする欲求の中に燃え立つものは宗教的な安心であらねばならなかつた。故に茲に他力的な救済としての淨土教の進出が當然生れ出て來たのであつた。此の苦を救ふものは此の安心より外には何物もなかつた。茲に於て文學の一背景として佛教思想の活躍がある。

四

平安時代に於ける繊細な情趣主義を去つて線の太い力強い意志の上に立てられたものは云へ以上の二大背景たる時の流れの悲劇は濃厚に文學の中にも織り込まれてゐるのである。

神云ひ佛云ふも世のなかの

人の心のほかのものは

ミ實朝は歌つてゐるが、明かに意志の叫びであり自己反省でもある。又

塔をくみ堂をつくるもひきなげき

懺悔にまさる功德やはある

勿論實朝がミの程度迄佛教を體驗したかは疑問であるが、一般的基調としての時代的背景が之に於ても窺がふ事が出来るのである。

ほのほのみ虚空にみてる阿鼻地獄

ゆくへもなしミいふもはかなし

に於て現實世界の虚無的な寂寥の氣味を充分に歌つてゐるのである。

五

政治家ミしては一事も成し得なかつた彼であつた。史家彼を評して痛劣ミ成すも無理からぬ處もある。身は源氏三代將軍ミ雖も彼の治世は十二歳より廿八歳に至る僅か十六ヶ年である。而もその若さを以てである。外には外戚北條氏の勢力將軍の權を凌ぐものがあつた。否それよりも實權は殆んミ總てが北條氏の掌中にあつたのである。彼に於て政治云々は全く求め難き事實である。

兄頼家は北條時政の爲に幽閉せられ、外にはかく外戚の勢力強烈であつて見れば彼は自然内省に向つて突き進むより外に道はなかつた譯である。幼少にしてすでにかく家庭的な冷徹に育てられてゐる彼である。其處に悲劇詩人ミしての

彼の運命は決してゐたのである。

ものいはぬ四方の獸すらだにも

あはれなるかな親の子を思ふ

素朴に親子の慈悲愛情を歌つてゐるが眞に多感な青年歌人としての全貌を發揮してゐる。茲にも彼が愛情を如何に求めてゐるか切々として身に泌みるのである。又

やまがつかきほに咲けるなでしこの

花の心を知る人のなき

に於ておやである。小さなスケッチ的な作品の中にも、自然に對する細密な心の動きと感受性が人に訴へるかのやうに歌はれてゐる。

いよほしや見るに涙もこぼれまらず

親もなき子の母を尋ねる

にも感傷的な彼の内面の吐露が見られ

うつせみの世は夢なれや櫻花

咲きては散りぬあはれいつまで

現も夢も知らぬ世にしあれば

有りてありし頼むべき身か

さりこもと思ふものから目をへては

しだい／＼に弱るかなしさ

等には人間さしての弱さ無常に泣く憂愁の影が濃く表はれてゐる。こゝにも此土淨土的な快樂的にして現實を享樂して止まない華々しさが少しもなく、こゝに時代の力の偉大さがあるのである。

六

次に實朝が歌に對して取つた態度等を少しく考へてみたい。彼が始めて十二首の和歌を詠じた云はれるのは十四歳の時であつた。

丁度萬葉調の素朴な藝術美が次第に練磨され古今集を過て新古今集に至つて其の度は頂點に立つてゐた。而しその巧妙さは見るべしとするも内面に缺けた迫力が乏しく次第に技巧的な文字の組合はせに没頭するが如き狀態を呈するに至り、特に和漢混淆文に變化したせいか分裂的な廢類的な經路を辿るに至りつゝあつた鎌倉初期の歌壇であつた。又その歌壇は三家に分立され互にその勢力を爭ふやうになり、従つて、歌自身も因襲の中に僅かの流動を示し得た丈で殆んど總ては新古今の模倣追從に過ぎなかつた。此の様な暗黒的な没落的時代の中に唯だ獨り傍系の詩人として立つたのが實朝であつた。

彼が十七歳の時古今集を得て其れを愛讀してゐた。そして十八歳の時には當然歌壇の宗家たる巨匠藤原定家の教へを受けるやうになり、廿二歳の時、定家は彼に萬葉集を贈つた。そして「鎌倉右府はたけたる歌人と思ひ侍る。古人の詠作に並べたりともすべて劣るべからず、實にたぐひ無き事と思ひ侍る」云はしめてゐるのであつて、そこに彼の進展ぶりの急速にして深遠なるを髣髴せしめるのである。

又實朝の讚歎者賀茂真淵は「古より移ろひ來にし世々の有様を見るべきものは歌なり」云々云つて思ひを萬葉の世に至し世の衰へに衰へ行く姿を怨みつゝも萬葉に復歸せんとした實朝の歌を「大空に翔ける龍の如く勢ひありて」云々

きりに彼の歌風に對して思慕をよせてゐるのである。

かく薄命にして而も多感なる歌人としての彼の經歷を見る時、武士としての面目と一貴公子としての風貌が躍如として活動してゐるのである。

即ち彼は新古今集による當時の雰圍氣を脱れて古今集に至り、後萬葉を見るに至りて始めて彼は彼自身の活きる場所を見出したのであつて、「御賞翫無_レ他。重寶何物過_レ之乎由有_レ仰」を吾妻鏡にある如く萬葉こそはまさに彼の求めて止まなかつた光明であつた。

七

實朝の性格に付いて誰かが「ハムレットとの近似がある」と云つてゐるが、たしかに的確な言葉であると思ふ。叔父に父を殺されたハムレット。而もその怨敵を義父と呼ばねばならなかつた處のハムレットと、甥に生を絶たれねばならなかつた宿命の千實朝とはその個々の點には多々差異はあるにしても、その中に一脈相通ぢる悲劇に生きた男であつたに異ひない。家庭内の葛藤の渦中に生きた實朝の性格は、たしかに所謂「ハムレット型」なる事をよぎなくされてゐたに異ひない。

武士としての實朝は京都に於ける公達を常に憧憬し、又詩情を萬葉の古に走らせた憂愁迫る彼の姿がクツキリと私の脳裡に如何しか深く刻まれてゐる。

従つて實朝はその苦惱からのがれる爲に幾多か歌會に蹴鞠に青春の血を湧かせたのであつた。

八

多情詩人實朝の禮讃者として今一人明治の歌人子規がある。

人丸ののちの歌よみは誰かあらむ

征夷大將軍みなもこの實朝

はたちあまり八つの齡を過ぎざりし

君を思へば愧ぢ死ぬわれは

こ彼子規は詠じてゐるが、實朝は實に鎌倉時代の獨自の歌人であつた。

大海の磯もこゝろに寄する浪

われて碎けてさけて散るかも

箱根路を我越えくれば伊豆の海や

沖の小鳥に波のよる見ゆ

こ鋭い視察の眼の持主であり、よく萬葉の清新を生かし切つた彼であつた。又

山はさけ海はあせん世なりこも

君にふた心わがあらめやも

こ君に忠節の大義を信念を以て大きく歌ひ切れた鎌倉武士としての彼でもあつた。

時によりすぐれば民のなけきなり

八大龍王あめやめたまへ

こ民草の爲に祈念して止まなかつた大將軍としての實朝であつた。

み冬つき春し來ぬれば青柳の

葛城山に霞たなびく

ミ當時の新勅選集に入る一流の歌人でもあり、

炭をやく人の心もあはれなり

さてこの世をすぐるならひは

素朴にして活氣溢ふるゝ萬葉を慕ひつゝも猶時代をぬけ出る事の許されなかつた彼でもあつた。

即ち眞淵も「鎌倉右大臣家集の始めに記るせる詞」の最後に彼が萬葉を讀み誤まり又、古の心は得ても猶當時古學者がなかつたが爲にその誤りを正す事も出來ず、假名違ひもあるが之は至し方なし、唯うらむらくは當時に適當な學者があるなかつた事であるミしきりに惜しんでゐるのである。

九

かく後の世の人をして感激せしめた實朝の人間ミしての手記に「金槐和歌集」がある。又の名を「鎌倉右大臣家集」ミも云ふが、大體内容は四季歌、戀歌、雜歌の三部より成つて居り總じて七百十六首ミなつてゐる。

而してその特色は彼が一意専心復古に志した處にあるのであつて、それらの歌全體總てが名歌金詠ミは言ひ難いのである。それは眞淵がよく指摘した處である。

傍系を護り當時の歌の流れの主流に竿をさゝす、唯自己の求むるがまゝに自由奔放に古への世に活躍した彼である。其處には金色の才能の光澤があるのであつて、其の底力ミなつたものは鎌倉武士の血液であり、一生不遇な生活ミ神經質な彼の性格に由來するものであるミ云へやう。

又反面彼を生かしたものは流轉極まりなき世相ミしての時代的背景ミ宗教的內省の要求された時代意識ミであらう。

兎に角悲劇の主人公として短い生涯を終つた彼實朝の一生を飾るものは歌人としての面目である。

唯惜しむべきは彼の詩情の圓熟を待たずして、即ち彼独自の歌境を發見し乍らもその完成を待たずして世を去さねばならなかつた事である。

十

以上の如く鎌倉時代に於ける独自の境と特異の位置を占めた源實朝は實集一卷を残して身は鎌倉三代將軍であり、位は右大臣正二位右大將征夷大將軍であり乍らも、宿命の子として承久元年正月廿七日鶴岳八幡の拜賀の歸途、甥公曉の爲に殺されたのである。即ち彼の廿八歳の時であつた。